

平成19年度地域状況レポート

あか牛（褐毛和種）を通じての交流学習・畜産に関わる食育

(社)熊本県畜産協会

総括畜産コンサルタント 川崎広通

平成19年は畜産物である鶏肉、豚肉、牛肉などの食肉をはじめ、菓子、土産物、贈答品に至るまで、日付、生産地、材料などを偽るいわゆる食品偽装が頻発した。また最近是中国産冷凍食品への農薬混入事件が発生し、いまだに原因がつかめないなど世間を騒がせている。今回の農薬騒動は日本がいかにか外国産の食料に依存しているかも認識させられる事件でもあった。

畜産の業界では世界的に飼料用穀物の相場が高騰し、燃料値上げ、運賃の暴騰も重なり飼料価格は近年にない上昇を続けている。その結果、飼料だけでなく、パンの原料の小麦粉や大豆などあらゆる食料価格が上がってきている。このことは畜産農家の経営を悪化させるだけでなく、日本国民全体の食卓も直撃している。

さらに、食品以外の事柄として、毎日のように目につくようになったものは人命を軽視した事件である。特に子が親を、親が子を傷つけるなどといったような以前は考えられなかった親族間の殺傷事件が目立っている。近年、日本社会は少子化、高齢化ならびに核家族化が進むことにより、若者の自分さえ良ければいい、今さえ乗り切れればどうにかなるといったような場当たりの行動も目につくようになってきた。

さて、最近の畜産経営においては、担い手の高齢化や後継者不足による飼養農家戸数の減少が著しく進んでいる。またBSEの発生以来、食品の安全をめぐる消費者の関心の高まりなど、畜産経営者も今までの飼養形態とは違った食を意識した新しい飼養管理が要求されてきている。牛肉の場合はBSEの発生以降、生産から流通までの透明性を確保する『トレサビリティシステム』が確立された。いまや、牛肉のみならず、食品の生産から消費までの「安全」を確定し、「安心」を得ることは消費者の信頼を得るために必要不可欠となってきた。

また平成17年6月には食育基本法が施行され、この中で日本の将来を託す子どもたちの健全な心と身体を培いつつ、様々な経験を通じて食の知識と食を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を形成するための食育を推進することが求められている。現在の日本は食料自給率が40%に満たず、食物を外国に依存する割合が多い。子供たちにその現状を理解させるためには、今自分たちが生まれ育った郷土の状況を勉強し、我々をとりまく自然や歴史も学習させる必要がある。

そこで今回は日本の将来を担う子供たちに、日々食している畜産物の「いのち」に対する畏敬の念や「食物」に対する感謝の気持ち、さらに郷土の畜産農家の現状を正しく理解してもらうことを目的に、普段家畜と触れ合うことのない都市地区の小学生と、農村部の畜産農家とのあか牛（褐毛和種）等を通じて行われた交流学習・食育等を紹介する。

1. あか牛との交流・食育活動の内容

1) 都市地区小学校の取り組み

本荘小学校の概要

今回の学習を実施した本荘小は、九州の中央部熊本県の西北部に位置する人口約67万人の県庁所在地である熊本市にある。同市は、宮本武蔵が修行をしたとされる休火山の金峰山を主峰とする複式火山帯と、これに連なる立田山等の台地からなり、東部は阿蘇外輪火山群によってできた丘陵地帯、南部は阿蘇から流れ出た白川の三角州で形成された低平野からなっている。

気候は、長崎県の境にある有明海との間に休火山金峰山系が連なるため、内陸盆地的気象条件となり、南国九州の中でも寒暖の差が大きく、冬は寒く、夏には「肥後の夕なぎ」といわれる蒸し暑い日が続くことが多い地域である。熊本市は熊本県の県庁所在地のため都市化が進んでおり、畜産統計で見ると、平成18年12月31日現在、肉用牛飼養農家は30戸で、飼養頭数は1,162頭である。

同校は明治維新の立役者である西郷隆盛率いる薩摩軍と政府軍との戦いで有名な西南戦争の始まる前の明治8年に公立中荘小学校として設立され、創立後130年を経過した歴史と伝統のある小学校である。昭和22年に現在の本荘小に改称されたが、『本荘』の地名の由来は、中世の荘園からきていると言われている。また同校は、加藤清正が建立した熊本城や熊本市の繁華街にも近く、交通量の多い幹線の沿線沿いにあり、昨今の少子化やドーナツ化などの影響で、1学年の児童数が15名前後、全体でも100名に満たない児童数の学校である。近年同校では学校全体の取り組みとして「いのち」をテーマに総合学習を行っており、学習内容をより効果的に理解させるために、実社会で活躍している人を学校に招いて授業を実施する「ゲストティーチャー学習会」も毎年行っている。

同校は近くに熊本市立の食肉センターがあることから、肉用牛に関係する総合学習を行ってきた。この学習は牛を飼っている人たち、牛の命と向き合って仕事をしている人たちとのふれ合う活動を通じて、命の尊さを感じ、命を大切にしようとする心と態度を育てることを目的に実施されている。熊本県畜産協会ではこの学習会に協力して今年で4年目となっている。

取り組みの内容

学校の教師であっても畜産の知識はほとんどないことから、まずは教諭に肉用牛を理解してもらうために、担任教師を畜産農家に招待し、農家の現状を理解してもらう試みを実施した。平成16年7月に下益城郡美里町の西田牧場を訪れた担任教諭は服が汚れることも気にせず、積極的に畜産の状況を研修していた。

その後、平成17年9月に本荘小学校の児童たちは元農林水産省の研究員など「ゲストティーチャー」から、肉用牛の基礎知識や阿蘇放牧地の役割などを学校の授業で勉強した。また平成19年11月には熊本県畜産協会も「ゲストティーチャー」として和牛あか牛の授業を行っている。(写真1)

「ゲストティーチャー学習会」という予習で子供たちの肉用牛への気持ちが高まった後、阿蘇や畜産農家に行くことにより、牛や農業をより身近



写真1 ゲストティーチャー学習会

に感じる事ができた。

お肉パーティの開催

牛のいのちに感謝することは最終的に食べることである。平成19年1月には新たな取り組みとして、料理学習『お肉パーティ』も開催した。学校菜園で自分たちで育てた野菜やあか牛牛肉を使って牛井とみそ汁を父兄といっしょに作った。「私は牛の肉を残しません。だって、牛のいのちは私のいのちになるのだから」。と子供たちが言っていた言葉が印象に残った。都市部の子供たちの牛の命に感謝する気持ちが、農村部の畜産農家に伝わっていくと思われた。(写真2)



写真2 お肉パーティの準備

2) 熊本県平坦地域(下益城郡美里町)の畜産農家との交流

西田牧場の概要(繁殖・肥育一貫経営)

本荘小の児童たちが訪れ、ふれあい交流学習を行った西田牧場は熊本県下益城郡美里町にある。

美里町は、熊本県のほぼ中央に位置しており、平成16年に中央町と砥用(ともち)町が合併して誕生した、熊本市から南東へ約30km、車で約40分程度の距離にある自然豊かな地域である。同町の平成19年2月1日現在の世帯数は4,263戸、人口12,598人、面積144平方キロメートルとなっている。

東に九州山地が広がり、さらに山や川に囲まれた自然を活かし、人々が連携しながら農林業を中心に営み、石橋、里山、棚田等地域資源を保持しつつ、里山文化を形成した地域である。この地域は、古くから、和牛褐色和種(通称:あか牛)が飼養されており、最近ではみかんや桑畑の廃園など未利用地を利用した放牧も盛んに取り入れられた地域でもある。平成18年12月31日現在、美里町の肉用牛飼養農家は111戸で、飼養頭数は1,222頭である。

西田牧場はあか牛(褐毛和種)のみ約100頭を飼養している繁殖・肥育一貫経営農家で、若い担い手の女性後継者が父親の指導のもと、繁殖部門では草地の広域利用(牧野への預託放牧)やシバ型草地放牧等を組み合わせた舎飼中心の経営で、肥育部門は購入牛も導入する一部一貫の家族経営である。(写真3)



写真3 西田農場と本荘小の児童

あか牛ふれあい体験学習

本荘小の近くには熊本市が運営している市立の食肉センターがあり、同校の三学年は、毎年地域にある食肉産業に携わる人々とのふれあいを通して、「いのち」に対する感謝の気持ちを学習している。平成16年4月に農村部の小学校から赴任した担任女性教諭は「い

のち」の尊さを学習させるには話だけではなく実際に生きた牛を見たり、触れたりすることが必要と感じた。「いのち」を直に感じるあか牛と学校の児童がふれあうことになったきっかけは、食肉の学習だけでなく生きている肉用牛の一生を学習させたい、子牛（命）が生まれてくるところを子供たちに見せたいという教諭の熱意から生まれた。

本荘小三年の児童たちが最初に西田牧場を訪れたのは平成16年9月であった。当時、当牧場では若い担い手の姉妹が中心に肉用牛経営を行い、肥育部門を姉、繁殖部門を妹が担当していた。牧場を訪れた児童たちは当初希望していた子牛の誕生にこそ遭遇しなかったが、西田ファミリーから新しい命が生まれる話やその時の母牛と子牛の様子、またお産を巡る家族の連携などをじっくり聞くことができた。当日も単なる農場見学に終わるのではなく、子牛へのほ乳や飼料給与、ブラッシングなど半日の学習を通じて牛の温もりを感じることができた。また児童全員がトラクターにも試乗するなど農家の労働も体験した。この結果は後述する「絵本」としてとりまとめられることになった。（写真4）

西田牧場との交流授業は平成19年度で4年目となり、最初に訪れた児童たちは現在6年生になっている。まだ牧場に行けない低学年の1、2年生は先輩たちが体験した話を聞くことや「絵本」などの成果物を見て牛の一生を学んでおり、学校全体であか牛とのふれあい授業を行っている。



写真4 西田農場でえさ給与

平成19年7月の集中豪雨は下益城郡美里町に甚大な被害をもたらした。そのニュースは全国にも大きく報道され、熊本県内に衝撃を与えたことは記憶に新しい。それを聞いた本荘小学校の児童たちも心配したらしく「西田さんたちは大丈夫だろうか？」とか、「牛が流されたって聞いたけど、ちとこさんのあか牛はどうだろうか？」などの質問が学校中であったと聞いた。このことから子供たちと西田ファミリーとの深いきずなを感じることができた。

絵本「牛のしょうたくんいのちきらきら物語」の完成

平成16年度の三年生たちは西田牧場の見学を皮切りにその後、熊本市食肉センターや地域の精肉店の見学学習を行い、それぞれの場所で仕事に対する思いや苦労話を聞いたりした。この学習を通じて、命を大切に育てる仕事と命を無駄にしないこととは、命に感謝するという共通の心があるということを理解できた。その結果自分たちが毎日食している「いのち」に対する畏敬の念や感謝の気持ち、さらに労働の尊さについて学習することができ、その後学級全員が力を合わせて共同でオリジナルの絵本として完成させた。（写真5）

熊本県畜産協会ではこの絵本をとりまとめ印刷製本し、熊本市内の92の小学校を始め、熊本県内の行政機関、畜産関係団体、全国の畜産関係機関、畜産協会などに配布した。この絵本はその後関係者から高い評価を得ることとなった。ある小学校からは熊本県畜産協会あて、校長自ら感動とお礼の電話があった。電話の向こう側では「以前本荘小に勤務していたものです。絵本をいただきありがとうございます。とても感動しました。このよう

に児童たちが自ら作成したオリジナルの絵本はありがたいし、学校の教育でも活用させていただきたい。」といった内容で感動のためか涙声であった。また、絵本を見た関東地方の県庁畜産課からの問い合わせや東北地方畜産協会からの質問などもあり、近畿地方のある県畜産課の担当職員は作成に至った経緯を聞くために熊本県畜産協会と本荘小学校に視察研修に訪れた。

このように一つの都市地区の小学生と、農村部の畜産農家との交流が感動と新たな出会いを生み出すことになった。またこの絵本は熊本市内の全小学校に配布されていることから、学校間で行われる研究会の資料、給食担当者の勉強会の資料としても利用されている。ある小学校では一冊しかない絵本を学校全体で、順番待ちで活用しているとのことであった。熊本県畜産協会ではこのように好評を得たことを聞き、平成18年度に絵本を増刷し、熊本県全体の約200の全小学校に配布した。このことからさらなる出会い、交流が生まれる可能性があると思われる。



写真5 完成した絵本の表紙

3) 阿蘇地域の牧野組合(阿蘇郡南阿蘇村)の畜産農家との交流

下碓牧野組合の概要

今回本荘小が訪れ、交流学习を実施した下碓牧野組合は熊本県阿蘇郡南阿蘇村にある。

熊本県の阿蘇地域は70年の歴史を持つ国立公園で、中央部に根子岳、高岳、中岳、烏帽子岳、杵島岳からなる阿蘇五岳がそびえている。また周囲には外輪山をめぐらし、東西18km、南北25km、周囲128kmに及ぶ世界最大級のカルデラ地形の上に広大な草原が広がっている。草原は千年の昔から、そこに住む人々が牛馬を飼い、草を利用するために手を加え、野焼き、干し草刈り、草小積みなど独自の草文化を生み出して自然環境を維持してきた。地域の年間平均気温は13℃、降水量は約2,600mmで、熊本平野に比べて霜の降りる期間が40日も長く、夏が涼しく冬が寒い地域である。阿蘇全体の牧野面積は約22,000haのほり、農家で組織された約160の牧野組合が草原の維持管理を行っている。

また阿蘇には、年間1,900万人を超える観光客が、のどかな風景を楽しみに訪れ、多くの人たちに愛される草原の放牧風景は阿蘇の大きな価値といえる。その中の草原は牛の放牧地として、安全な肉用牛を生産するだけでなく日本の畜産業を支えていると言える。また草原に降りそそぐ多量の雨は、広大な大地にしみこみ、白川などの一級河川の水源となり、約230万人に水を供給す



写真6 下碓牧野組合の親子放牧

る九州の水がめとなっている。

下磧牧野組合がある南阿蘇村は、平成17年2月13日に長陽村、久木野村と白水村が合併して誕生した。同村は阿蘇くじゅう国立公園阿蘇カルデラの南に位置し、雄大な南阿蘇の山と緑、そして、環境庁の「日本名水百選」に選定されている白川水源に象徴される豊かな自然環境に恵まれ、また、数多くの歴史ある温泉を擁した村で、熊本市から北東へ約40km、車で約50分程度の距離にある阿蘇山と外輪山に囲まれた大自然豊かな地域である。同村の平成20年1月20日現在の世帯数は4,380戸、人口12,195人、面積13,730haとなっている。

この地域の農業は、古くから稲作と和牛褐色和種（あか牛）の複合経営を中心に放牧畜産を實踐しており、平成18年12月31日現在、南阿蘇村の肉用牛飼養農家は249戸で、飼養頭数は2,753頭となっている。

今回交流学習を実施した下磧牧野組合は南阿蘇村の旧白水村地域に位置し、村有の入会地を使用する入会権を有し放牧・採草を行うことを目的とした牧野組合である。昭和58年2月10日に設立され、有畜農家15戸の利用で始まった。その後、有畜農家戸数が減少し現在では7戸の有畜農家で牧野面積約68haで（改良草地38ha、野草地30ha）を利用し運営している。組合員はあか牛（褐色和種）のみを飼養しており、放牧に対する意識が非常に高く、親子放牧や最近では周年放牧、水田裏放牧にも先進的に取り組んでいる。（写真6）

牧場交流体験学習（阿蘇のあか牛から学ぶ）

熊本県には阿蘇の草地にあか牛が放牧されている。本荘小学校の児童が初めて阿蘇郡南阿蘇村の下磧牧野組合を訪れたのは平成17年10月であった。そこで「交流体験学習会」を行い、本県の代表的な肉用牛「あか牛」と直にふれあった。牧野の役割やあか牛についての先生役としては下磧牧野組合の組合員7名が行い、都市部の子供たちと農村部の人たちの交流が始まった。当日は牛道を牧野組合の人たちやあか牛といっしょに歩いたり、牛の角輪に触れて年齢を数えたり、皮膚や毛に触れて牛の温もりを感じたりした。しかし、なかなか牛に触れない者、鳴き声だけで驚く者、牛のふんを踏みつけて騒ぐ者、牛よりも糞虫に興味を示す者と、初めて見る自分より何倍も大きなあか牛や阿蘇牧野の壮大きさに感動した様子であった。また広々とした牧野の中で農家の人々と昼食をともにし、様々な疑問に対する質疑応答も行った。その結果、肉用牛を飼っている農家の人々とのふれあいを通じて、命に対する感謝の気持ちを実感することができた。（写真7）（写真8）

さらに後日、牧野組合の代表者は突然本荘小学



写真7 あか牛から学ぶ



写真8 牛と人と昼食をともに

校を訪れて授業をするなど新たな交流が生まれることとなった。

平成18年度はこの取り組みに関心をもった地元のテレビ局の取材対象になり、その様子は一つの物語として、平成19年2月に人気帯番組の特集コーナーとして熊本県全域に放映された。一つの試みとして始まったあか牛を通じた食育活動が熊本県全体に浸透するきっかけになった。

平成19年2月に熊本市内で牧野組合などとの交流で得た成果を披露する機会があった。その時には牧野組合員の方々も会場に招待され、再び交えて談笑することになった。平成19年11月には今年度の新三年生が新たに牧場を訪れて、交流はいまだに続いており、当行事は本荘小学校と牧野組合の新しい伝統になりつつある。また交流学習の成果は「心に残る一言集」、「モーモーポエム」、「カレンダー」ならびに「記録DVD」として関係者に配布され好評を得ている。（写真9）



写真9 完成したカレンダー

4) 牛ふん堆肥を使った食育

「いのちのつながり」の学習

本荘小は「いのち」をテーマに総合学習を実施していることは前述したが、まだ牧場に行けない低学年の1、2年生に対しては畜産を理解してもらうため、先輩たちが制作した絵本などの成果物を使って牛の一生を学習している。さらに効果的に「いのちのつながり」を学習するため、熊本市内の堆肥センターで作られた牛ふん堆肥を使って、かぶ大根作りを学校菜園で行っている。

堆肥の提供（フードパル熊本）

熊本市の北部の西里地域の小高い丘の上に、食に関する施設が集まる「フードパル熊本」という食のテーマパークがある。花と緑に包まれた257,500平方メートルの園内では食品製造工程の見学やソーセージづくりなどの体験ができ、様々なイベントや料理教室が開かれる「熊本市食品交流会館」も設置され、また手作りのお菓子やとうふ、惣菜なども販売され、アクセサリーや花籠づくりなども体験できる「こだわり工房村」がある。その中に開設されている「とれたて市」では、毎朝、地元の生産者によって運び込まれる新鮮な野菜や果物など地元の食品が安い価格で販売されている。

そこでは牛ふん堆肥も販売されており、それが今回の食育に使われた。製品名は西里とれたて市堆肥生産組合生産の「こるが一番」といい、これが一番だという熊本弁で表現されている。この生産組合は地域の畜産農家を中心となって平成13年3月に設立された。この地域内には野菜生産農家も多く、組合設立以前は野菜農家の農地は管内の有畜農家が少なくなったことで、徐々に地力低下が進んでいた。また畜産農家にとっては農産物直売所フードパル「とれたて市」の開設にともない、熊本市内外からの来客の増加等もあり、ふん尿のにおいの問題が深刻化していたため環境保全型農業への意識が高まっていた。お

互いの課題を補うため、この堆肥センターは地域の畜産農家3戸を含めた計7戸で組織された。現在では当堆肥組合が中心となって、母体組織の西里とれたて市会の会員に、堆肥による土づくりの推進も行っている。

牛ふん堆肥を使っの食育「いのちのつながり」

平成17年10月に本荘小学校の低学年の1、2年生は西里とれたて市堆肥生産組合生産の「こるが一番」を使っ学校花壇を菜園に変える授業を行っ。(写真10)

まず、堆肥とは何か?から始まり、その役目など思いのままに学習し。堆肥が牛のふんからできていると聞いて最初は「くさい」とか「汚い」と言っていたが、説明を聞いた後では「くさくない」し「楽しい」と土の開墾、畑作り、かぶの種まき、水まきといのちを育てる作業に没頭していた。

その後は5ヶ月かけて水かけ、草取りなどを行い、平成18年2月に無事収穫の時を迎えた。自分たちで育てたかぶを夢中で収穫し、洗い、そして全日本司厨士協会熊本県支部長をゲストティーチャーに料理の学習を行い「いのちのつながり」の学習が成就した。「牛は肉も皮もふんも全てが無駄にならない。」と子供たちが言っていた。(写真11)



写真10 牛ふん堆肥でかぶ植え



写真11 かぶを使っの食育

子供たちの感謝の気持ちは「心に残る一言集」「モーモーポエム」などとして取りまとめられ、関係機関に配布され好評を得た。

以下 3年生15名の「モーモーポエム」を紹介する。

ぼくは牛(高廣 光)

ぼくは牛 毎日、まごころこめて、松岡さんにおせわしてもらってる

ぼくは牛 毎日、ちとこさんにやさしく声をかけてもらってる

ぼくは牛 毎日、白くてわたがしみたいな雲をながめてる

ぼくは牛 ぼくは下ぜきぼく場で生きている小さく大きい牛なんだ

はじめてさわれた(水野ひろ登)

そっと近づいて 二、三步あとずさり またそっと近づいて また一步後ずさり
さわってみたい、でもこわい 「わたしはこわくはありません さわってどうぞ」
そっと手を出した 「うわぁ あたたかい」
「あたたかい、もうこわくない。本当はやさしんだ」

牛さん こんにちは(はし本ふみや)
牛のあたまをなでなでしてみました。
牛が「まだまださわって、どうぞ」と言ってくれました。
もう一回、牛のあたまをなでなでしてみました。
牛が、「下げきぼく場にきてくれてありがとう」と言いました。
ぼくは、「またくるね」と言いました。

草を食べる牛さん(岩崎しょうたろう)
いつももぐもぐ おいしい草をもぐもぐ
よだれを出してもぐもぐ ごっくんしてはもぐもぐ
おいしい水をごくごく うれしい水をごくごく たのしい水をごくごく
牛さんはおいしい草をまもります

牛の命はわたしの命(まつ本ゆき)
かわいそうでたまらない 牛のお肉をわたしがのこしていたことが
かわいそうでたまらない ランドセルをなかせてしまったことが
かわいそうでたまらない 牛のふんを「くさい」と思ったことが
だからわたしは決めた もう残さない
だって牛の命はわたしの命になるから

牛の目(毛利れいじ)
牛の目、すきとおっている目 やさしい目
牛の目、かわいい目 牛の目、美しい目 ぼかぼかした目
ぼくは、そんな牛を なでてみたくなる
声をかけてみたくなる じっとみつめたくなる

ぼくはふしぎでたまらない(河本とおる)
ぼくはふしぎでたまらない 牛にリーダーがいることが
ぼくはふしぎでたまらない 牛の血をすうハエがいることが
ぼくはふしぎでたまらない 牛の目がすき通っていることが
ぼくはふしぎでたまらない 牛のつのがあたたかいことが
牛のふしぎはまだまだつづく

牛かいさん(みつしお大や)

モーモー 行かせなきゃいいんだよ
モーモー 最後だけはぜったい涙を出させないぞ
モーモー そんなに泣いたらこっちまでなきたくなるよ
牛かいさん 泣いていいですよ
本当の気持ちをあらわしていいんですよ
牛さんだって本当のことを言ってもらえば 悲しみがへると思います

牛の命（野田寛琴）

ふしぎなかおりでつつまれている
あたりからやさしい こもりうたのような 牛のこえ
やさしいキラキラの目でむかえてくれる
こんなにやさしい牛たちの命を たべていると思うとかなしくなる
今できること かんしゃの気持ちでいっぱい食べること のこさず食べること
そして牛という大切な友だちに かんしゃすること
もう一度 友だちと会いたいな
心にしまっている すてきな友だちに

牛のなぜ（谷口絵む）

牛の目はなぜすき通っているのかな それは心がやさしいからだよ
牛はなぜ何回も、もぐもぐしているのかな それはかみかえしをしているからだよ
牛はなぜ体が大きいのかな それはたくさんの草を食べているからだよ
牧場の人はずいぶんいっしょうけんめい育てた牛をせりにだすのかな
それはお肉になるからだよ
人間はなぜ かわいそうな牛のお肉を食べるの
それは私たち人間が生きていくためだよ
「牛の命をいただきます その分 かがやいて生きていきます」

牛の目（上田英里奈）

牛さんの目がすきです やさしいような 心がぼかぼかするような
そんな牛さんの目がすきです 牛さんのわらっているかおがすきです
楽しく遊んでいるような うれしいような そんなわらっているかおがすきです
牛さんのなき声がすきです 「こっちへおいで」って言うような
「いっしょにあそぼ」って言うような そんななき声がすきです
牛さんのあたたかい毛がすきです 「幸せですよ」というメッセージのような
きもちいいような そんなあたたかい毛がすきです

牛が好きでたまらない（高沢まな）

牛の顔が好きでたまらない 牛のかわいい顔が
牛の毛が好きでたまらない 牛のふさふさした毛が

牛の目が好きでたまらない 牛の愛くるしい目が
牛さんのんびりのんびり ゆったりゆったり がんばって生きてね

命のつながり（田上れいな）

牛のフンはひりょうになって ひりょうは畑のえいようになって
畑のえいようがトマトの命になって
ありくい命が鳥の命になって 鳥の命が草の命になって
草の命が牛の命になって そしてまた牛のフンにもどってくる
「わになって つながる命に むだはなし」

牛のおしゃべり（北島克紀）

いつも親牛のそばにいる子牛 「お母さんおなかがへったよ」って言ってるのかな
いつも友だちと遊んでいる子牛 「明日も遊びたいな」って言ってるのかな
もうすぐせりに出される子牛 「いやだもつと牧場にいたいよ」って言ってるのかな
台風が来た時のリーダー牛 「みんなこっちにひなんするんだ」って言ってるのかな
牛の言葉は人間には聞こえない でも牛はみんなでおしゃべりしている
「牛さん今度 ぼくも入れてよ」

みんなちがってみんないい牛たち（岩本侑祐）

力強くぐいぐいとミルクを飲む たけ子ちゃん
ゴクゴクとぼくを引っぱってミルクを飲む たまひめちゃん
生まれてすぐまいごになってみんなに心配をかけてまいごちゃん
角をかがやかせ ピンとおしゃれなエミリーさん
来年はお肉になってしますしょう太くん
みんなほうせき箱のように 光っている牛たち
みんなちとこさんに 大事に育てられている牛たち

ゲストティーチャー学習会による予習で始まり、阿蘇牧野でのあか牛交流学習、美里町でのふれあい交流などを通じて「いのち」と「食」を学んだ3年、4年生の「現場体験学習」や低学年の1年、2年が牛ふん堆肥を使った「かぶのいのちの学習」は本荘小学校の食育として定着しつつある。また、単なる見学会として終わるのではなく、その成果は次々とその後に入学してきた新入生に受け継がれている。

一つの試みとして始まったあか牛を通じた食育活動は、本荘小学校の伝統となり、このことにより、「いのち」と「食」を学ぶことの重要性が認識されてきた。都市部の子供たちが学んだ「いのち」と「食」に感謝する気持ちが、農村部の畜産農家に伝わっていくと思われた。

今後はこの活動が他の学校、地域にも広がっていくことを期待したい。